

答辞

本日は、看護学研究科の学位記授与式に、皆様からご懇篤なる励ましのお言葉をいただき、修了生一同を代表して深くお礼を申し上げます。

私たち修了生は、それぞれの臨床や教育実践の場で抱いた問いを解決すべく、看護学研究科へ入学してまいりました。

私の臨床経験の中で生まれた問いは、喉頭全摘出術を受け、生命にとって不可欠な機能と共に、全身にも影響が及び、豊かで文化的な生活を楽しむための機能をも変化してしまう患者さまが、生活を再構築する過程において、看護師はどう寄り添い、支援できるのだろうかと考えたことでした。

病棟看護師として、看護をしながら研究を進め、対象の身体の変化や表現、支援者の関わりを分析する過程においては、特殊性を捉えた看護実践が無ければ、この研究を実現できませんでした。自分の取り組みや看護が、再構築の支援になっているのか、不安になり、壁にぶつかっては原点に立ち返ることの繰り返しに、焦燥感を感じずにはいられませんでした。先生方からの「対象者自身が、回復過程にあると描けるには、看護師としてどう関わればよいのか」という問いや、ご助言をいただき、研究者として看護師として、自分の実践に照らしながら問い続ける毎日でした。また、職場や職歴の違った、大学院の仲間の努力する姿にも動機付けられました。そして、対象の良い変化が見えたとき、実践の中から研究に取り組んだ意義や、対象には回復に向かう力が備わっており、不要に消耗させていることを取り除くことで、生活の再構築へ向かう力を引き出せると、導き出すことができました。

それぞれの研究において、対象の健康支援につながる結果を導き出し、発表できたことは大きな喜びでした。本日は都合により、修了生4名が揃うことはできませんでしたが、互いに励まし、高め合いながら過ごした日々が力になり、今日の日を迎えることができました。大学院での学びや研究の過程は、臨床で看護を実践する上でのモチベーションになっていたのも、終了することが淋しくも感じます。ですが、研究はこれからが始まりと捉え、研究の成果を人々の健康と看護・教育の発展のために、社会化できるよう精進して参ります。

最後になりましたが、研究にご協力いただいた対象者の皆様、私たちを励まし辛抱強くご指導くださいました諸先生方、ご理解を頂き応援して下さった職場の皆様、健康を気遣い支えてくれた友人や家族に感謝申し上げます。

本学のますますの発展と、諸先生方のご健康、ご活躍、並びに在学生の皆様のご健闘をお祈りいたしまして、答辞とさせていただきます。

令和四年三月十六日

看護学研究科修了生代表 木下 雅恵